

# 木知原の今昔！

32号：6・2・9

木知原のあゆみ

No 6

## 室町時代(南北朝合体後)の木知原



南北朝合体後は金閣寺・銀閣寺・一休さんの時代が80年ほど続いた。

木知原は南北対立の緊張から解放されて平穏なくらしが始まったかに思えたが大きな動きがあった。事例を自作年表に位置付けてみたがうまく伝わるか不安な今号である。

複雑な時代であるので『そんなこともあったのか』の軽い気持ちで一読されたし。



## ナヌッ！ 木知原 土岐氏に抵抗？

△先ずは下記史料(要約文)を…

時代の推移 (概略)	
鎌倉	
1333	
建武新政	
1336	南北朝
室町	
1392	
1406	南北朝
1427	
1447	
1467	戦国の世
1525	
1552	
1568	
1573	安土桃山
1603	戦国の世
江戸	
1868	

□木知原は応永13年(1406)から文安4年(1447)にかけての約40年の間、京都の藤原四条家の分家である「鷺尾家」の所領であった。(大友家文書)

□16世紀前半には京都「勸修寺」の所領であった。(勸修寺文書)

□「外山村は十七丁の田と七町余りの畠があり、糸四十両余、八丈絹三十四疋、綿一千六十両、和紙七百帖の所當(税収)があった」(勸修寺文書)

※大永5年(1525)：勸修寺文書の頃はすでに戦国の世が始まっていた

△木知原は土岐頼芸(よりのり)が斎藤道三に追放(1552)されるまで土岐氏の支配下が継続していたと思っていたが、史料によると世情の混乱期に京都との結びつきを深めていた。

## ? 木知原はなぜ都(京都教団)と結びついたのか？

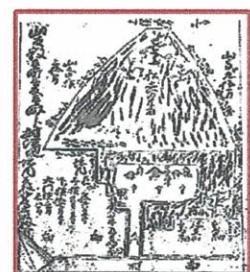
△外山郷は前々から土岐氏の支配に不満を持ち年貢の不納や当時西美濃地区にあった本願寺教団の拝領地区との結びつきを深める等の抵抗を繰り返していた。そのうちに税を納めるまでに都(教団)との関わりを深めたのである。

△為政者に物言えぬ農民が集団行動で意思表示する姿は今までには見られなかった事である。お咎めを覚悟の自立(自治)意識の新たな芽生えか垣間見られる。

△また税が目的とは言え、糸・絹・綿・和紙などの換金作物を栽培生産していたことが記録されているのも新しい発見である。



## 田社神社建立のねらい



△田社神社については9～11号で紹介済みであるが、建立の

応永34年(1447)頃の村は上記のように“一揆でも”といった暮らしであるにもかかわらず神社を建立している。しかも四社全てこけら葺きとあるから費用も大変であったのにどこにどのようなパワーがあったのか？

△憶測であるが領主に抵抗する自立・團結力をより高めるための心の拠りどころを神社建立に求めたことも一因と思う。以後600余年何度も修理改築を行い今日に至っている。

## 近づく戦国の世

△土岐家への抵抗や神社の建立は南北朝合体から戦国の世までの僅かな期間の出来事である。村人は教団と縁を切り神社も建て“よし！”と意気込んだことでしょう。しかし間近に戦国の世が近づいていたことなど知る由も無かったと思う。